

赤(虚無の宝箱より) カミヤリヨウイチ

一角獣は追っているモノがあった。
捕らえようとしているモノがあった。
まだ誰にもつかまったことがなかったので
名前が付けられていなかった。



最初は山の深いところに現れた。
それは絶えず移り変わっていくモノだった。
そしてそれは一角獣が呼んだモノではなかった。
時をおいて彼方からやってくるモノだった。
すこしずつ見えだすモノだった。
しかもヒトツずつ違う変わりゆくモノだった。
ヒトツとして同じモノがないモノだった。

やがてやがて辺り一面の緑の色を
ある朝声ひとつたてず
特別のきぜんとした朝
特別のふれたことのない空気
特別の一回だけしか着ることのできない
特別の仕立ての生地に変えてしまう。

明らかに変えていくモノ
赤を着たモノ
紅くするためにやってきたモノ
一角獣はこれらすべてを捕らえようとしても
捕まえきれなかったので
そのまま眺めてそのまま味わうことにした。

その名づけようもない変わりゆくモノから
一枚の紅い葉が落ちて
街へも降りていくと
人々は「秋が来た」と仮の名前を呼ぶのだった。